

なぜ被災地で働くのか

～新しい教育の可能性を模索して～

石川県立輪島高等学校

教諭 山上 佳織

死を覚悟

令和6年1月1日16時10分M7.6最大震度7の大地震が能登半島を襲った。その時わたしは帰省のため、のと里山海道を車で移動していた。緊急地震速報が車内に鳴り響く。すぐに大津波警報が発令された。のと里山海道を降り高台に向かおうとしたが渋滞し急斜面で停車した。斜めの態勢のまましばらくすると見知らぬ男性が声をかけてくれた。「良かったら、ここ停めて。」民家の庭に車を止めさせてもらった。20時ごろまでそこに身を寄せたがさらに高台へ向かい家族4人で車中泊することにした。輪島朝市付近の火事の様子が報道されている。震えるわたしに、ぼつりと息子が言った。「お母さん、全部夢やったらいいのにね。起きたら、夢やったら…。」空腹を忘れるほどの恐怖。子どもたちも何も欲しがらなかった。寒くて長い夜だった。親は生きているのだろうか。明日、輪島高校に行くべきか。子どもたちはどうしよう。自宅はあるのか。つぎつぎと心配事で頭がいっぱいになった。



写真 六水町 1月18日撮影

きっかけは SNS 携帯電話はつながらない

様々な不安から少し心が軽くなったのは管理職からの発信だった。もともと連絡網として SNS

を活用していた輪島高校にとって、それは有事に大いに役立った。

“命懸けで頑張っている仲間が輪島にいる！！”それを知ったのも SNS だった。急に力が湧いてきた。ライフラインが整っていなくても、わたしにもできることがきっとある。ただこんな状況の中、わたしが死ぬわけにはいかない。子どもたちと離れて暮らす決心がつかなかった。

しかし『今、学校に行かなくて、いつ行く！！』と自分自身を奮い立たせ子どもたちと離れる覚悟をした。真剣に自分の死後のことを考えたのを今でも覚えている。



写真（左）学校周辺 1月26日撮影（中央）舗装されるまでに4か月かかった5月6日撮影（右）教室は避難所として使用2月2日撮影

生きていることを無条件に喜ぶ

地震直後は、知り合いと顔を合わせるたびに無条件に抱き合っ、生きていることの喜びを共感し合った。「これからどうする？」じゃなかった。「今どうしてる？」と、とにかく励まし合った。

最も困ったのは水の確保だった。かじかんだ手で雪をかき集め溶かす。バケツにギリギリまで入れると余震でこぼれる。雨が降ったら、洗面器、鍋、雪遊び用のソリも並べて雨水をためた。風呂には入れないため大鍋で湯を沸かし発泡スチロールに移して体を洗った。入浴中も余震が続く。落ち着かない。長い髪は洗いにくいため切った。夜は貴重品を身に付けたまま玄関近くの部屋で寝た。命をつなぐ努力を最大限した。これらの生活面での工夫はすべて家庭科の授業で伝えた。よりよく生きることをあきらめなくなかった。生徒たちにもあきらめてほしくなかった。



写真（左）地震の揺れで車が北側に 30 cm 移動した様子（中央）自宅 桐ダンス・テレビ・机などが倒れていた
（右）キッチン 引き出しのレール破損し開きっぱなしとなった 冷蔵庫は東側に 30 cm 移動 1 月 4 日撮影

なにかカタチにしたい

そんな心身ともに厳しい状況が続く中、とにかく明るい若手教員たちには何度も心が救われた。その年の 12 月行われた奥能登教員スポーツ大会では日曜日にも関わらず多くのメンバーが参加した。いつも以上に盛り上がった。そこで「チームパーカーが欲しい。」ということが話題になった。その時、なにかカタチにしたいと思った。何色にも染まらない個性豊かな先生たち。

このスポーツ大会をきっかけに『未来に向かってみんなで新しい教育をみつけよう！ともに羽ばたこう！』という想いでチームパーカーをデザインすることにした。



写真（左）1 月 22 日よりオンラインと対面による授業支援実施 1 月 31 日撮影
（中央）2 月 13 日始業式 昼食を用意できない生徒のために 60 食分の弁当を教員が準備する様子 2 月 13 日撮影（校長）
（右）教員スポーツ大会の様子 12 月 1 日撮影

なぜ命を懸けて働くのか

土砂崩れ、大雪、豪雨による河川の氾濫、自然災害が続く。パンクは繰り返すし、事故があればすぐに渋滞する。世界でも忙しいと言われる日本の教員。子育てしながら働くだけで寿命が縮まりそんな人もたくさんいるだろう。にもかかわらず、なぜ被災地で働くのか。それはハード面

での居場所は失ったが心の居場所があるからではないだろうか。それは生徒たちも同じで、みな確実に強くなりつつある。自分の考えを言葉にするようになった。仲間を気にかけるようになった。

各々が守り切った命の経験談は、世界中の困難に立ち向かう人々の心に届くだろう。ひとりじやなにもできないことも痛感した。自分たちが知らないところで多くの人たちが動いてくれたおかげで今日がある。それに応えたい。



写真（左）臨時職員室こたつが設置される “ほっとする空間” ができた様子 2月1日撮影

（中央）生徒玄関にシャワー提供 生徒も教師も使用可能 大阪ボランティアチームが快く撮影に応じてくれた 2月8日撮影

（右）自衛隊による昼食用炊き出しと支援物資 1月29日撮影

教育の価値観が変わるとき

危機下の教育は授業のスタイルではなく、教育の必要性を認識するところからはじまる。

今後、AI（人工知能）教材を活用した授業研究、他県との金融教育高大連携プログラム、能登応援弁当プロジェクト…わたしにできることを少しずつ実現していきたいと思う。

輪島から全国へ。輪島から世界へ。未来への教育の可能性はひろがっている。これまでとは一味違う一歩先ゆく輪島高校。

そんな想いを込めたオリジナルパーカーを着て悪戦苦闘の日々は続く。



写真 オリジナル WAJIMA パーカー WAJIMA を応援してくださる OB も着用 チーム教育の輪がひろがる